

「見出されたフランドル—ユルスナール『黒の過程』(1968)に おける絵画をめぐって—」

村中由美子

マルグリット・ユルスナール(1903-1987)は、フランス人の父とベルギー人(フランス語系)の母を持つ、ブリュッセル生まれの作家である。しかし、生涯の大半を旅に費やし、1950年に居を定めたアメリカ・メイン州のマウント・デザート島で多くの作品を執筆したため、むしろコスモポリタン性を彼女の特徴と考えるのが一般的である。本発表では、ユルスナール作品においてこのコスモポリタン性と対照的に見出すことのできる、リージョナルな要素としてのフランドル性に焦点を当てる。具体的には、代表作の一つである『黒の過程』(1968)のなかに間接的に描かれているフランドル絵画が、この作家の文学創作においてどのような意味を持っていたかについて考察する。さらに、コスモポリタン性とフランドル性という一見相反する要素が、ユルスナール作品において有機的な結びつきを持っていることを明らかにしたい。